

育苗期いもち防除剤

薬剤名	薬剤の種類	散布時期	箱当り使用量	備考
ベンレート水和剤	ベノミル剤	は種時～は種7日後頃	500倍液 500ml 1,000倍液 1,000ml	かん注
ビームゾル	トリシクラゾール剤	緑化始期	200倍液 500ml	かん注
嵐プリンス箱粒剤6	オリサストロビン・フィプロニル剤	床土混和又はは種時(覆土前)～1葉展開前	10～15g	混和又は散布
Dr. オリゼプリンスエース粒剤	オリサストロビン・プロベナゾール・フィプロニル剤	出芽後～1葉展開前	25～50g	散布

※注意事項

- ① Dr. オリゼプリンスエース粒剤の出芽後～1葉展開前処理と、嵐プリンス箱粒剤6(50g/箱)の床土混和又は播種時(覆土前)～1葉展開前の処理は、育苗期いもち防除と本田の葉いもち防除を兼ねています。
- ② 嵐剤(嵐プリンス箱粒剤、嵐スタークル箱粒剤など)は防除効果が高い薬剤ですが、耐性菌が発生する可能性があります。採種は周辺では使用を控えましょう。

## 育苗期の管理について

育苗施設内の温度管理

無加温で出芽させる場合は施設内の保温に努め、被覆期間が長期に及ばないようにしましょう。また、施設内の温度が高すぎても障害が発生し出芽不良となりますので、ベタ張りの除去前でも温度が上がりすぎる場合は換気を行って下さい(出芽後、被覆物はずしたら、再度、被覆しない)。

出芽～1葉期頃までの温度管理は、その後の生育や田植え時の苗質の善し悪しに大きく影響します。高温になるとその後出てくる葉が伸びやすく、軟弱徒長苗の原因となり病害や生育障害の発生を助長します。逆に低すぎても苗立枯病の原因になります。

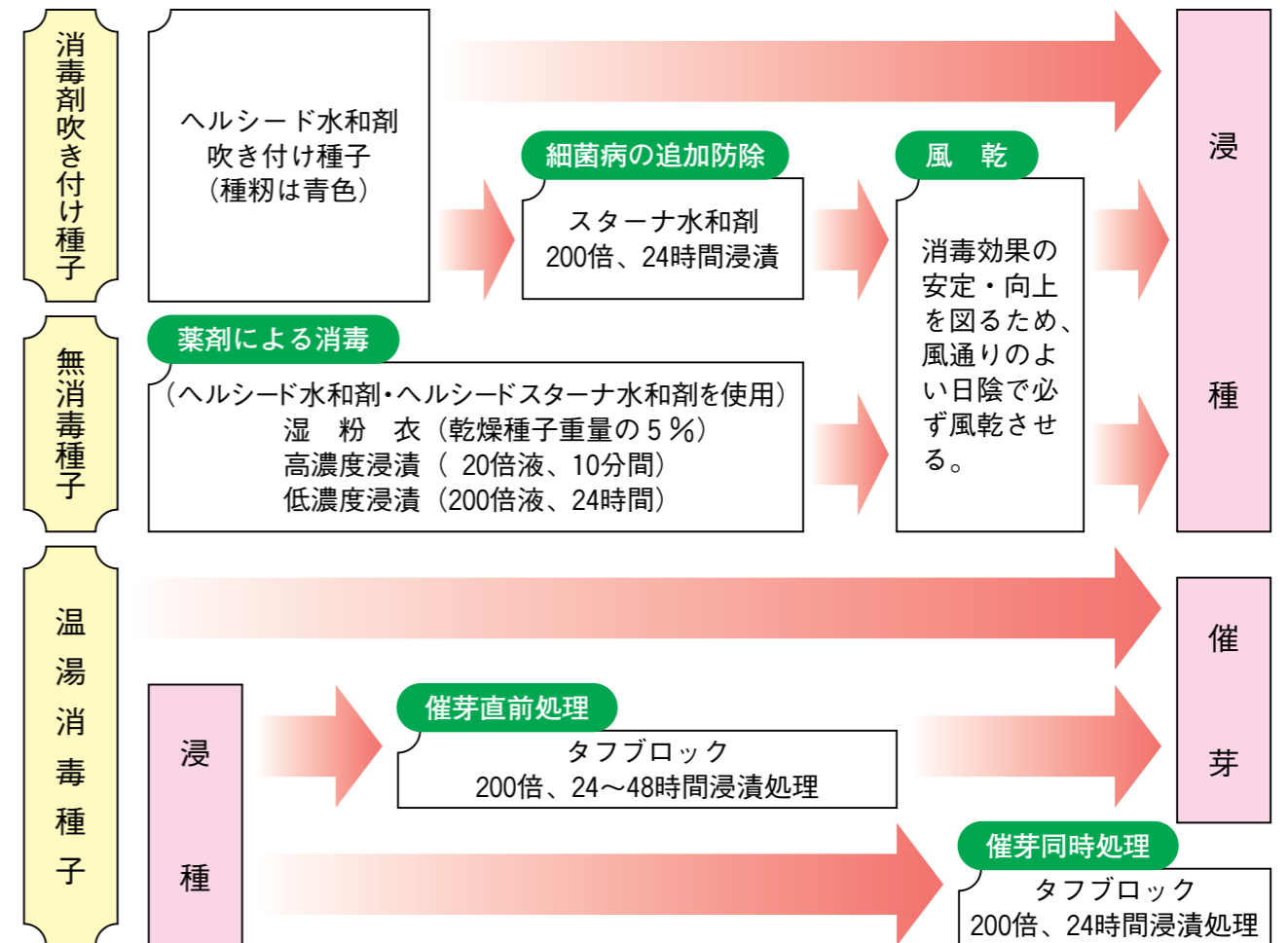
かん水の基本は朝に1回たっぷり

種	苗	中	苗
出芽期	30～32℃	出芽揃いまで	無加温ハウス・トンネル保温
緑化期	昼20～25℃、夜10～12℃ 第1葉鞘長：3～3.5cm	播種後20日間	昼25℃以下、夜5℃以上 第1葉鞘長：2.5cm程度
硬化期	昼は解放、夜間5℃以上	2.5葉期以降	昼は解放、夜は5℃以上

- ① 播種時に十分なかん水を行い、ベタ張り除去までかん水はしません。
- ② ベタ張り除去後は、覆土の持ち上がりを落とす程度にかん水し、露出した種粒は見えなくなる程度に覆土します。
- ③ 育苗前半は水分要求量が少ないので、過かん水にならないように注意します。
- ④ かん水は朝に十分かけ、回数をできるだけ少なくします。夕方のかん水は床内温度を下げるので行わないようにします。
- ⑤ 育苗後半になると、日中しおれやすくなりその部分にはハウス内におけ等をおき、ため水し、その水を使用し床内温度を急に低下させないよう工夫します。

## 種子消毒や浸種時の水温に注意!

- ① 昨年の登熟期間が高温で経過したことから、種子の休眠が深く出芽に時間がかかる傾向にあります。浸種期間、水温を十分確保し、催芽を確実に行いましょう。
- ② 種子消毒や浸種時の水温が低い場合は、種子消毒剤の効果も低くなるため注意が必要です。
- ③ 消雪時期が遅れることが予想されます。余裕を持った春作業計画を立てましょう。



安心のネットワーク **NOSAI仙北**から  
**園芸施設共済 水稲育苗ハウス全棟ご加入を!**  
 なんととっても **安心が一番!**  
 例) 設置面積30坪(補償期間2ヶ月)  
**補償金額 178,000円**  
**掛金はわずか1,129円です。**

## 消毒剤吹き付け種子の注意点

- ① 消毒剤吹き付け種子は、浸種する事によって種子に着いた薬剤が溶け出し、種子に吸収されることで消毒されます。そのため、浸種する際の水量は種子容量の2倍程度(種籾1kgに対し、3.5ℓ)とし、浸種開始後2～3日間は殺菌のため水を交換しません。
- ② 種子消毒の効果は水温により大きく左右されるため、薬液及び浸種温度は10～15℃を確保するよう努めましょう(10℃以下では薬効が低下します)。
- ③ その後は酸素供給のため1～2日おきに水を交換し、胚が透けて見えるまで十分に給水させてから催芽します。
- ④ 浸種時の吸水ムラがあると催芽がバラつくため、種子袋の位置を入れ替えたり袋を揺すります。

## 温湯消毒種子の注意点

- ① 温湯消毒種子とその他の種子は、一緒の容器で浸種しないようにします。
- ② 種子袋を載せるパレットやシート等は清潔なものを用品ます。
- ③ 採種は周辺のは場については化学合成農薬による種子消毒を行います。
- ④ タフブロック処理は、催芽直前に200倍液で24～48時間浸漬、または催芽と同時に200倍液で24時間処理します。
- ⑤ 薬液と種籾の容量比は1：1とします。種子袋の内部まで薬液を速やかに行き渡らせるために、浸漬直後に袋を数回振とうします。
- ⑥ タフブロックと以下の薬剤との体系処理は行わないようにします。
  - ・嵐剤の庄土混和又は播種時処理。
  - ・ダコニール1000、ダコレート水和剤、ベンレート水和剤の播種時処理。

## 催芽時の注意点

- ① 催芽は30～32℃で24時間程度行い、芽の長さはハト胸程度とします。品種毎にハト胸状態を確認し、催芽が不十分な場合は28～32時間に延長して確実に催芽しましょう。催芽率はその後の出芽、育苗の不揃いにつながりますので、細心の気くばりをしましょう。
- ② 温湯消毒種子は芽の動きがやや早まる場合があります。品種によっても催芽時間が違うので、同時処理は避けましょう。

## 播種について

播種日が早すぎると、低温による出芽不揃い等の障害に遭遇しやすくなります。播種日の設定は、本田作業及び、田植え適期を考慮し、田植え日より逆算して最適な葉令で移植できるように設定しましょう。

なお、覆土は厚すぎると酸欠による発芽不良となるので、種籾が隠れる程度(約5mm)とします。

また播種時のかん水が多過ぎても、酸欠による出芽不良になるので水量を確認しながら作業をします。

種類	1箱当乾籾	1箱当催芽籾	育苗日数	草丈	葉齢	10a当箱数
稚苗	150g程度	180g程度	20～25日	10～13cm	2.0～2.5	20～25箱
中苗	100g程度	120g程度	30～35日	13～15cm	3.5前後	30箱

## 土壌伝染性病害対策

リゾープスやフザリウム等の土壌伝染性病害は以下の薬剤で防除しましょう。

時期	薬剤名	濃度及び散布量 (箱当り)	苗立枯病菌の種類					薬剤の使用回数
			リゾープス菌	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾクトニア菌	白絹病菌	
播種前	タチガレエース粉剤	6～8g		○	○			播種前1回
播種時	タチガレエース液剤	500倍 500ml		○	○			播種時又は発芽後1回
	ダコニール1000	500～1,000倍 500ml	○					播種時1回
発芽後	ダコレート水和剤	400～600倍 500ml	○		○		○	播種時1回
	タチガレエース液剤	500倍 500ml		○	○			播種時又は発芽後1回
	バリダシン液剤5	1,000倍 500ml				○	○	— (発病初期)

※タチガレエース粉剤は、播種5日前までに混和する。

タチガレエース液剤は、ダコニール1000(リゾープス)との同時かん注が出来ます。ダコレート水和剤との同時かん注は薬害のためできません。

## 育苗期のいもち病防除

本田におけるいもち病の伝染源は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みです。育苗施設から稲わら・籾殻を撤去し、適正かつ効果的な種子消毒、育苗期いもち防除を行うことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。

必ず種子消毒を行い、育苗期のいもち防除はベンレート水和剤、ビームゾル、嵐プリンス箱粒剤6(10～14g/箱)またはDr.オリゼプリンスエース粒剤(出芽後～1葉展開前処理)で実施しましょう。

また、乾燥状態で冬を越した稲わら・籾殻は水稻育苗施設内や周辺におかないようにします。